静かなる乱の中で

劉 茜懿†

キーワード：映像視覚表現、隠喩、思想、日本美学、文脈、情報通信技術

1. 初来日

初めて日本に来たのは、1991年。まだ幼い時、父の仕事の関係で、故郷の中国から日本に渡った。「(北京と)似たようでまったく違う」頭の中でぼんやり残っている東京への第一印象はそれだった。窓の外の景色は、色違いのネオンがいっぱい、街はどこことなくキラキラ輝いてた気がする。私の日本滞在記はそこから始まった。前後合わせて、14年にわたる滞在記の幕開けだった！

当時の家の前にある境川という川は、東京都と神奈川県の間を流れる川で、川沿いを家族で良く散歩していたのを覚えている。また、獅子座流星群が家の前の広場を流れた瞬間を、今でも覚えている。私の感受性を作り上げたのは、のどかな相模原の環境のおかげだと思う。

映画と出会ったのは、日曜洋画劇場という番組でだった。その中でも、黒澤明監督の『夢』(1990年)が最も印象に残っている。監督が亡くなった直後の特番だった。テレビの中で映画評論家・淀川長治氏(1909～1998年)が、番組の最後、涙声で話していたのを覚えている。“映画に対して大人たちはそこまで真剣になるのか”…と幼き心に印象づいている。

1999年、中学入学を控え、日本を離れるときが来た。住み慣れた日本を離れたいと両親に訴えたが、自分の国の言葉をほぼ忘れていた私に、両親のアドミッションは降りなかった。桜が降り落ちる中、8年間にわたる日本での生活はあっけなく幕を閉じた。帰国後、最初は苦労したけど、そのとき祖国に帰って本当によかったと思う。そのおかげで、二つの国の文化を知ることができたのだから。

2. 再来日

北京電影学院美術学部バーチャルスペースデザイン学科を卒業し、再度日本に来たのは2010年の秋。早稲田大学国際情報通信研究科(GITS)のプロジェクト研究コース：デジタル映画ヴィジュアル表現研究の修士課程に入学した。

日本は、ほとんど何も変わっていなかった。10年前街を歩いていた人々は、ほとんど10年前と同じ佇まいで、静かに日常を築いていた。主婦は変わらず主婦同士で集まり、公園では子供達が遊んでいた。ただ違うのは、鏡に映る自分が、その風景の中の“大人”になっていたこと。知らぬ間にジェネレーションがアップしてしまった。

東京フィルムセンターで黒澤明監督の『影武者』を観たのが、再来日後初めての劇場映画鑑賞だった。日本で観た黒澤映画は北京電影学院の標準放映庁*1で見ると少し違うニュアンスがした。日本の空気で見ると、映画に出てくる人物の仕草や言葉が臨場感を作り上げて、そこにいるかのように迫力があつた。影武者も将軍もやがて自分を失い、真実と虚実、善意も悪意も入れ替わり、その曖昧で意味深な結末を私は理解できないでいた。

その後、GITSの授業で、小津安二郎の『東京物語』を観賞し、教授からの解説を聞いた。カットの至るところに時計が入っていて、お母さんの死に立ち会えなかった子供たちは結局時間を気にしていた…このような描写に衝撃を受けた。特に、三男のエピソードが印象的だ。時間を守ることが役目の駅員なのに、自分の母の葬式に間に合わなかったことを、あまりにも日常的に描くから、より一層悲しみと呼んだ。小津映画は、日常のイメージで積み上げられたリアリティなのだと思う。『この映画は、実は時間に関する物語なのです』と教授から説明を受けたとき、そう

† 早稲田大学 理工学術院

"Mess in an Orderly World" by Liu Qiany (Faculty of Science and Engineering, Waseda University, Tokyo)

*1 母校北京電影学院の劇場。2006年北京電影学院標準放映庁において開催された日本映画週で、「椿三十郎」(1962年)を劇場鑑賞している。

だったのかと納得した。

3. 私と東京、創作のはじまり

そして初めての一人暮らしがスタートした。自信满满の新生活のはずだったのに、なぜか一人での時間が多かった。言葉以外は、やはり一からやり直し。そう、ここは新しい土地。自分から動かなければ、何も始まらない。

引っ越しやあらゆる手続きなどで、再来日して3ヵ月が経とうとしていた。そろそろ何かを始めなくては... 焦っていたので、とりあえず1枚の絵画を描いた。日本で感じたことを濃縮した、その1枚の絵画がすべての始まりだった(図1)。後にも先にも、この1枚が私の東京での6年間を象徴できたと思う。体の要素と繋がる時空間、そして国境を気にしない文字、それらすべての矛盾に冗談を言うように構成された画面。自分でもわかった、日本にきたことで、自分の中の何かが変わったことに。

初めて辿り着いた新しい世界観を、絵だけで終わりにしなかった。絵画でまとめた考えを元に、一部のCGアニメーションを制作した。前後で10ヵ月の時間を得て、アニメーション作品『天籟籟(てんらいらい)』は誕生した(図2)。その作品の最初の頃の制作風景を今でも覚えている。机に向かって、思いのままに絵コンテを描いた。このアニメーションには叙事的物語がなく、ありとあらゆるイメージを

繋ぎ合わせた、私人的表現だった。天籟という、中国に伝わる伝説の古い音を探しに行く傍ら、少女が探し求めていたのは自分自身の発する何か、というテーマだった。『天籟籟』(2012年)が完成した後、それが数々の展覧会や映画祭で上映されると同時に、自分の創作について語る機会も増えていった(図3)。しかし、自分の脳内で固めた、抽象的なコンセプトについて語るのは、安易なことではなかった。いい評価を求めて、全心全力で説明したけど、聞き手の表情が全部もの語っていた-「意味がわからない」と…。そのとき気づいた、クリエイターの言葉には、創り出された作品と同重量の価値があるということに。視覚表現を追い求めるとき、ただただヴィジュアルのサプライズを創り上げるだけでは、何も長続きしないと…。

4. 言葉を探す旅

気がつけば、あっという間に博士課程へ進学していた。視覚表現の研究と実践の日々の中で、一連の創作を繋げる

図1 絵画作品『HEY』(138 cm × 276 cm)
東京で感じた独特な時空間のフィーリングを描いた絵画。

図2 アニメーション作品『天籟籟』スチール

図3 ヴィジュアル映画作品『鑑真と方圓の時空旅行』のフォトグラフィー

文脈を探し出そうとした。安易なことではなかったし、時間もかかった。出先、根拠、引用先など、映像表現は文章から入っていくべきなのか、感性を濃縮した画面から入っていくべきなのか、二つの要素を調合していく必要があるのではないか、それは新たな課題となっていた。私はその課程を、“見えない創作”と捉えた。

論文を1本書いても、作品が一本でき上がったわけではない。でも“書く”ことが、時として“描く”ことよりも重要なのだと、確信していた。

文章においては、“アイデンティティ”、“タオイズム”、“ポストモダン”などが私のよく使うキーワードだった。やがて、私は「オリエンタルリズム」という考えと出会った。それは私のような「文化の違いのゆくえ」を題にして考え事をするクリエイターたちへ贈る、プレゼントのような言葉であった。地理でも文化でもない、目に見えない分け目、強弱が存在するのがこの世界だと、その著書から読取れた*2。このような視点で世界を見たとき、私は世界を旅してきた自分を見つめ直すことができた。

そして、言葉に出会うことで、日本をより深く理解する機会にも恵まれた。日本を知りつくしていると思っていた私は、実は何もわかっていなかった。なぜ障子から入る薄暗い陽光が美しいのか、なぜ日本人は季節を大事にするのか、静かなる表面に隠された日本の美学を知ることになった。「ものの哀れ」や、「侘びしさ・寂しさ」のような日本の美学の言葉から、禅学や松尾芭蕉の詩などを読み、視覚表現に繋ぐエッセンスを見出していった。「無常感」—このフィーリングを、あなたは感じたことがあるだろうか？電車に乗ってはとした瞬間、窓の外に並ぶ家を見て、終わりを知れない回想の波に浸ったことはあるだろうか？秋が近づき木々の色が赤く染まり始めると、無償に悲しく

*2 エドワード・サイード著『オリエンタルリズム』Pantheon Books (1978)

なることがなんだったのか、日本の美学の中に、実は答えが秘められていた。そして私も、言葉を知っていく上で何かの本質に触れ始めていた。

その後、私は『鑑真と方圓の時空旅行』(2014年～)というアート映画のプロジェクトを立ち上げた。時空を超越して言葉やアイデンティティを探るのが、この映画のテーマだ(図3)。この映画のために書いた論文は、富士ゼロックス小林節太郎記念基金のもと、この春に論文集として発表された。自分では異例の、作品の前に論文が仕上がるケースとなった。この映画の脚本には長い時間を使っているが、このような新しい制作のメソッドが、作品にどんな効果をもたらすか、これから検証して行きたいと思っている。

2014年の博士課程の卒業式の日、私は早大の小野梓記念講堂でスピーチをした。『想像力・創造力』というテーマだった。スピーチを聞く人々の瞳に迷いはなかったと思う。それは、私自身が話すことに迷いがなくなったからだと感じた(図4)。

図4 博士課程卒業式のスピーチにて

図5 ポストン大学Department of Art and Art historyで開かれたトークセッションの様子

5. 東京から世界へ

ありがたいのは、再来日したこの6年間で、東京から世界へ羽ばたく、そのようなことが実現できた。インド洋のレユニオン島でビエンナーレに参加し、3ヵ月の滞在中でインスタレーションを製作したり、アフリカのコモロ島で開催された第1回目の映画祭でアニメーションを上映したり、米国の大学で自分の創作にまつわるトークセッションを開催し、現地の大学生と交流したりと、東京からあらゆる国へ出発し、世界を見てきた6年間でもあった。見ず知らぬ土地でいつも思うのは、故郷の中国と、半分故郷となっている日本の、アジアの二つの国を知れて、本当によかったということ(図5)。「中国はどんなところ? 日本はどんなところ? アジアはどんなところ?」世界中の人々に、よくこのような質問を受けている。「アジアは、はるか古代と、はるか未来を感じさせる場所だよ」と答えている。古代から伝わる文明と、未来に繋がる情報通信科学が、クロスし、面白い光景を築き上げているのがアジアだと思う。私は日本に来たから、このような面白さに気付けたのだと思う。

6. むすび ～日本へのメッセージ～

カルチャーショックを感じるどころか、東京にいと一種の帰属感すら感じている。最近感じるのは、日本での生活が一見静かに見えるのは、その発達した科学、工業、人間社会のシステムがあるおかげだ。私は一見清楚な社会光景の中に乱のエレメントを見抜いた。それは、夢を追い求めている人々の、目に見えない葛藤である。乱という文字を用いて伝えたいのは、日本を生きる人々が、必死だということ。サラリーマンたちが本気で仕事をしていること、アーティストや映画人が本気で日常について考えているこ

と、科学者たちが新しい可能性を常に追い求めているということ、この一見静かな日本で暮らすのは、結構大変なのだということ、みんなが何かと葛藤して、より良い明日を追い求めていること。

私はこの国から何を得て、何を残せたのだろうか?

世界がこれからどんどん一つに結ばれる中で、日本にも変化が求められているのだと思う。謙虚さを最小限にして、肩の力を抜き、よりラフに、みんなが積極的に交流できる国になってほしいと思う。人と人の間の距離がもう少し狭くなれば、どんなに素晴らしいだろう。時間はかかるけど、必ず明るい未来が待っているということを、日本を生きる人々には忘れないでほしい。

最後までこの文章を読んでくれた人々に感謝したい。改めて、日本はクリエイターや学者にとってとても良い活動の環境を与えていると思う。また、文化や情報通信技術が繁栄しているから、世界中の研究者が絶えず集まってくる。そのような人々と出会い、意見を交換し、創作へのインスピレーションが生まれる—それが日本で生活する至福の時だと日々感じている。

(2016年4月3日受付)

劉 茜懿 2010年、北京電影学院美術学部バーチャルスペースデザイン学科卒業。同年、早稲田大学大学院国際情報通信研究科修士課程入学。2014年、同学科博士課程修了。在学中に「2013年度上海新青年芸術家賞」受賞。作品が、スイス、中国の美術館でコレクションされる。ヴィジュアルアーティストとして情報通信技術を用いたメディアアート作品を創作する傍ら、コンセプトフォトグラフィー、絵画などの作品を発表している。現在、早稲田大学理工学術院の研究助手として、映像におけるコンセプトや隠喩性を強調した視覚表現を研究している。今後もメディアと映像表現について研究を展開していく予定である。博士(国際情報通信学)。